

光明第一六号 大正九年四月

様

住岡狂風

□ 私たちは生きねばなりません。どんなに辛くても苦しくても生きねばなりません。そしてその一日一日に、何か為なくてはなりません。私は生きたいと思います。五十年、六十年、有年そして永劫に。

□ ただ夜が明けるから起き、日が暮れるから寝る。それは、真に生きているのではありません。真の人生には真に人間として歩む幸福と苦しみがなくはならぬ。

真に人間的な偉人

私は真に人間的な偉人を崇拜する。日露戦争がすんで、宇品に凱旋せられた乃木將軍は「沢山な陛下の赤子を殺した。相済まぬ。何の顔あつて父老にあおう。」とその眼底には涙があつた。真に人間的な將軍を崇拜する。スピノザは、信念のためには、ユダヤ民族からの追放も恐れず、大学教授にも目をかけなかつた。スピノザが好きだ。「我は旋陀羅の子なり。」と言放つて、石や瓦の飛ぶその中に、法華經一卷手にして立つた日蓮は、何ものも恐れず、法と国家を愛し、信仰に生きた。私はこの強い人間らしい人間を尊敬する。親鸞は尊い家門を去つた。二十年間の研究學問をも捨てた。そして、機法一体の信仰生活に突入した。徹底的な人間的な歩みを教えてくれた聖人を崇拜する。私の崇拜する耶蘇は決して衆生の罪を償つて立つた耶蘇ではなくて、この村落、その岡で人の行くべき道を説いて歩いた乞食のような耶蘇である。我が崇拜する者は、それらにつけられた金箔ではなくて、その人の持つる真の人間味である。

巻頭の叫び

全て私はあなたを棄てない

□ あなたは病気でしよう。重体だろう。今死ぬるかも知れない。けれど私は棄てない。あなたは今死の扉の前に立った。人生最高の厳肅を見つめている。あなたにはまた最後の祈りが残っている。あなたが残す最後の言葉は、あなたの父と母と兄弟と、そしてあなたの床の周囲の人たちの一生を支配する。

□ 私はあなたを棄てない。あなたは三百六十五日薬を飲んでいるかも知れない。けれど、あなたにはまだ果たされない仕事が残っている。あなたには生命が残っている。あなたの病気は、偉大なる精神生活を生む。あなたはまだ人のために祈ることも泣くことも愛することも残っている。私はあなたをまだ棄てない。信仰と養生とによつて健全になつて働く光明が前途に輝いている。

□ あなたは、学校の成績が悪いかも知れない。けれど私は棄てない。あなたが算術が出来ない。地理がおぼえられない。それでどうした、あなたにはもつと広い世界が残っている。あなたは真実になり得る。あなたの手と足と口とを、あなたの感激に、あなたの誠に捧げて、他人のため自分のために使うことが出来る。天才の墮落したよ、りあなたの真面目が人生には有難い。

2

□ 私は、あなたが罪人かも知れないけれど棄てない。あなたは今すぐ目覚めることが出来る。そして、光輝ある新生に入ることが出来る。私はあなたの過去を責めない。ただあなたが今日覚めていないのを悲しむ。けれどあなたを棄てない。

信仰に生きよ

信仰は感謝を生む

人間は信仰あるが故に偉大です。天才を天才たらしむるも信仰です。船頭の多い船、飼主を何人ももつ犬。昨日は利に走り、今日は名に走り、明日行くべき所のわからない人間、その生活こそ醉生夢死です。信仰のない生活です。信仰は愛による私の統一です。愛よ、誠よ、浄化されたる愛、何物にも侵されぬ、火にも焼けない誠、それこそは信仰です。

愛のあるところ感謝があります。愛する者の感謝、愛せらるる者の感謝、私たちを感謝に、歓喜に導くものは愛であり、信仰であります。人間が真実に生きようとする時、幾多の煩悶に泣き、悲観にもだえることでしょうか。けれど、その苦しみは、信仰を生んだ時のみ、感謝の光明に生き得るでしょう。

全ての人類よ喜べ！ 否、むしろ泣け。あなたが今人として生きているその大事実
に驚け。二本の足は悉く地につきながら、あなたの心眼は、高く高く天の彼方をにら
んで、沸きかえる希望に、輝く光明に、あなたを見出す平等な偉大な何物かを持つて
いるではないか。

全ての人類よ喜べ！ 躍れ。あなたが何をしようとして、人だという事実には違いな
い。生きていることが苦しいかも知れない。苦しいのが何だ。善人になって苦しむ
のが何だ。悪人になって楽しむと言うのか。逆境が何だ。不幸も逆境も私が人た
ることを動かし得るか。逆境が私たちの感謝の邪魔にはならない。後藤静香先生3
だったか、

「私の幸運の経験は悉く棄てても、逆境の経験だけは棄てたくない。」
と言われた言葉が思い出される。

死がある。死ぬることは厭だ。けれど死すら私たちが感謝することの邪魔ではな
い。私たちに、苦しみもなく悲しさもなく、死さえなかつたら、何と言う変な者だろ
う。死は悲しい事実にはちがいない。私たち凡人には、死が恐ろしいではない。けれ
ど、私たちが人だということには、生れた！という事実のあるかぎり、その裏に死が
予定せられている。まことに人は、「死」という一切如何なる力も手段も加えることの
出来ない悲劇を考えるが故に、

「人生は厳粛なり」と、
私自身に立ちかえるのではないか。

「悲劇は喜劇よりも偉大である。」之を説明して、「死は全てを封ずるが故に偉大だ。」
という者がある。取りかえしがつかぬ運命の底に陥って出て来ぬから偉大だと言う
のは流れる水が逝いてかえらぬ故偉大だ、というのと一緒である。運命は単に最終極
を告ぐるがためにのみ偉大にはならぬ。忽然として生を変じて死となすが故に偉大
なのである。ふざけた者が急に襟を正すから偉大なのである。襟を正して、道義の必
要を今更の如く感ずるから偉大なのである。人生の第一義は道徳にありとの命題を
脳裏に樹立するが故に偉大なのである。道義の運行は悲劇に際会して始めて、渋滞せ
ざるが故に偉大なのである。(漱石文集)

ああ私たちは生をもつています。そして又、唯一つの死をもつています。私たちは生きています。唯一つの死を残しています。一度しかない死を残しています。死が来るまでに、死が残っている間に！ 私たちは緊張をおぼえるではありませんか。じつとしてはいられないではありませんか。まだ唯一つの死は残っている。五十年はあまりに短い。今日一日今日一日暮れることの何と早いことよ。じつとしてはいられない。遊んではいられない。なまけてはならない。

ああ死が何で生きることの邪魔になる。生きること (信仰) 感謝することの邪魔になる。

私は冷たい家庭の話に泣かされます。継母に泣かされる人と一緒に泣きもしました。悪がはびこっているのも知っています。妻を泣かす夫、夫が死んで家の柱がなくなった婦人、世の中の苦しさも醜い一面も知っています。けれどそれだと言って、私の感謝には曇りは来ない。

悪に蹂躪された正義もなく、力に圧迫された弱者もなく、泣く者も怒る者もない世なら、私たちに何でこの歓喜が湧いて来よう。

私の周囲をつつむ一切の人、一切の物、一切の出来事は、それが悲しい出来事にせよ、うれしい出来事にせよ、ともかくも、私一人のこの感謝を育ててくれたではないか。一人にもせよ、二人にもせよ、私を信頼し、私を愛して下さるではないか。私の涙は、悲しい人に力を与えるではないか。小さいにもせよ、真実は届くではないか。私の存在が、何人にもせよ、第二第三の感謝を生むではないか。私の生きていることが、うれしくなくて何としよう。

「未知の住岡先生、私は去る日〇〇〇の一友人の宅を訪れ、机の上に輝く光明を読ませて頂きました。開巻第一、巻頭の叫びを一息に読んだ時、人生の奮闘に疲れた私の冷やかな眠れる神経に、一大鉄槌を加えられた様な気がして、思わず新しい涙をこぼしました。それが心の底から湧く温かな感激の涙であつたのです。」

今日来た手紙の一節です。片仮名しか知らない七十近いおばあさんの御手紙に、
「センセイサマ、センジツハゴシンセツナルオココヨリ、オテガミアリガタクチヨウダイイタシマシタ。ワタクシモ、アナタニイツカユツクリトオウテ、ゴエンガイタダキタイト、イツモオモウテオリマシタノニ、コレマデハ、インネンガナカツカ、アフコトモデキナイノニ、コノタビハ、ナントイフ、ミオヤノオハカライデセウ。ワタクシハ、アナタニ、ジキニオアイシタヨリモ、アノオテガミガウレシクテナリマセン。アサモバンモ、ナンドヨマセテモラツタヤラ…… (下略)」

私たちは、こんな御老人すら、棄てることは出来ない。仮名四十八文字のおかげがこんな福音を生むではないか。何という美しい人生だろう。

何でもいい

何でもいい。あなたの心の主人を一人になさい。たった一人の真実の主人の命令を生かしなさい。「親のために」とそれでもいい。「お国のために」とそれでもいい。「芸術のために」とそれでもいい。「親鸞を信ずる」とそれでもいい。「キリストを信ずる」とそれでもいい。

何でもいい。それであなたが感謝するなら、それであなたが使いきれぬなら、何でもいい。型は何でもいい。箱は何でもいい。唯あなた自身のもので、あなた自身が入る型なら、型は問題でない。あなた自身が問題です。

私の村に恵比寿堂が出来た

私の村に立派な恵比寿堂が出来ました。結構です。神壇なりと、恵比寿堂なりと、何でもいい。造ることはうれしいことです。けれどもこれだけは問うておきたい。「皆様は何のために、恵比寿堂を造りました。」と。「お金が儲かるから」と、それだけならお気の毒でも皆様のしたことはあまり賛成は出来ません。一体恵比寿堂は商人道の信仰的であります。常に笑っているあの相は商人のとるべき相です。不正直に、横着に出来た人たちが恵比寿様に金儲けを祈る。何というお目出度いことでしょうか。一体に神様は、五つの誠に対して五だけ、十の誠に対して十だけあなたの心に動かない信念を与える外に何もして下さらないことを御承知なさい。

私たちは凡人ですから、面白くない時にも神によつて笑う心となり、報いられないあなたの誠をも神の前だけに捧げて、感謝の内に算盤が取れるなら、私は恵比寿堂の出来たことを心から喜びます。

信仰の証のほしい心

信仰に何か証拠のほしい心は人間の墮落である。近頃△△教とか△△道とか言う宗教のようなものが何十万の信徒を集める。何か神秘的な不思議を表はして見せる5と、随分教育のある人までが迷つてしまふ。そんな教えを広めている人たちには何か外に目的があるには違いない。けれども、一口のかけごえで眠らしたり、言葉一つで体の自由を失わせる位は私でもする。そしてそれは何の不思議でもない。私はこんなことに信仰の根拠をおく人や、釈迦もキリストも孔子も親鸞も人間なるが故に信ずるのでなくて、御光がさしたと言うが故に信ずる人が悲しい。危機に立てる人心よ。田舎はまだ夜があけぬ。町に都会に夜が明けかけて、信仰のない人間たちが、溺れた人が藁でもつかむように、証拠を握つて安心しようとする。

信じよ。信仰せよ。無条件に信仰せよ。何を！「ただあなたを。」そうです。「ただあなたの存在する大事実を。」

唯、あなたの存在を

支那の程子曰く

「理より之を言つて之を天と謂ひ、稟受より之を言つて之を性(人の)と謂ふ」と。又曰く

「天地精を儲し五行の秀を得たるもの人となる」と。

程子は信じた。宇宙は理・氣二元によつて出来る。氣によつて、万物の形を成し、理は一貫の生命として、万物に存在す。而して人は、陰陽二氣によりて生じ五行の秀氣を受けて出来る。人は万物の靈である、と。何という偉大な人生観だろう。程子は宇宙の万物吾と渾然一体たることを言つた。

「もし夫れ至仁なれば即ち天地一身である。天地間の品物万形は四肢百体である。夫れ人豈四肢百体を見て愛せないものがあるうか。聖人は仁の至である。独りこの心を体するのみだ」と。

これを仏に聞こう。

「仰いで無量寿絶対愛の仏を信ぜよ。汝と感応する時、汝も亦仏である」と。

信ずる我は亦、幾劫の昔より、育てられた(南無の二字)私で、愛の中に浸った私の存在だ。

或は又言う。我にはもと、玲瓏透徹の仏心がある。迷盲を去って究竟に至れば、一切平等皎々たる本具の霊体たり(向上、上菩提)。その心をもって世界を見る。万法一如、柳は緑花は紅なれど山海大地是れわが心、我心は即ち山海大地である。そこに感謝があり、無碍があり、活動がある(向下、下化衆生)。

仏というもその実体即ち法身は色なき形なき香なき、過去現在未来を超越せる真理その者であつて、宇宙に遍在している。表われては、釈迦となり親鸞となる。(程子と如何によく似ていることよ。)

救われ、自覚する時、全て神である、仏である。社会に活動せる数限りなき菩薩よ！ 仏よ。

基督に聞く。

「野の百合花は如何にして育つかを思え、勞めず紡がざるなり。われ汝に告げん。ソロモンの栄華の時だにも、その装い、この花の一つに及かざりき。神は、今日野にありて明日炉に投げ入れられる草をも、かくよそわせ給えば、況して爾曹をや。6 ああ信仰うすき者よ。然れば何を食い何を飲み何を衣んとて思わづらうなかれ」と。

蝶の羽の粉さえも、顕微鏡で見れば、美しいコスモスの花卉の様な形、一片の雪さえも玉の様な純白得も言われぬ美しい結晶。それに私は人間だ。

も方がいい。も方がいい。全ての人よ、世界最大の驚異は私の存在だ。

真面目になれ！ あなたの本心、飾らない、てらわれない本心、愛せんとする、正義に味方せんとする、突進せんとする、あなたの本心を真面目に育てて行け。あなた自身の信仰(私の言うことは私の信仰の形骸のみ)が湧いて来る。

信仰なき修養

私たちは凡人だ。信仰なき凡人の修養くらい悲惨なものがあるうか。例えば砂上の楼閣である。例えば張子の虎である。(三月十四日夜十一時半)

慨くことは止めよ！ 悲しむことを止めよ！

愚痴を止めてその口で

貴女よ、サアサア愚痴をお止め下さい。少しのことで愚痴を言えば、小さい愚痴も大きくなります。空涙でも長く続けば悲しくなります。

お金がなければ辛いことは私だって知っています。けれどお金以外の広い広い世界があるではありませんか。あなたには、あなたが今、生きているという事実があるではありませんか。人間だという事実は万人平等ではありませんか。

何であなたは他人ばかり見つめています。他人のうわべに出た事ばかり見て、何でそんなに愚痴を言います。あなたにもあれ以上のものがあるではないか。愚痴を止めましょう。そしてその口で、歌の一つもお歌いなさい。そして、早くその五月雨の様な気分を転換なさい。それだけでも、あなたの生活には一段と光がそいます。一歩お進みなさい。そこには、あなたの口から出る美しい言葉、やさしい言葉を待っている親があります。兄弟友人があります。あなたが考えている様に世の中は灰色でしようか。灰色に見えるもあなたの心、光り輝くと見えるもあなたの心、あなたのお心の持ちようです。

鬼の日にも涙とか

私たちが小さい自分の内に勝手な気分を作って、私の周囲の人を見たら悪人ばかりに見えるもする。涙一滴落さない人に見える。けれど、人を見たらすぐにかみつく土佐犬すらも、その飼主だけは信じています。人を殺して氷の様な裁判廷に立った罪人が、峻烈な検事の論告には涙一滴おとさないでも、同情ある弁護士という言葉には、脆くも涙の人となるではないか。

悲しむ前に、慨く前に、あなた自身を見つめてごらん。気にいらないのはあなたの利己主義が立たないためではないか。あなたが濁っているではありませんか。人が悪いのではなくて、あなたがまず悪かったのではないか。

さあ立て！ もう立て！

あなたよ何時まで待ったら起きるといふのだ。何時までたったら本気になるというのだ。何時が来たら他人のために泣こうと言うのだ。

「私自身が悪いのに、私自身が悲しいのに、私自身が忙しいのに。」 何時までも私々と、自分の扉を鎖すことです。愚痴からはなれないことです。

窓を明けなさい。扉をあけなさい。サツと春の風を吹きこませて、新規一変なさい。あなたの内にはきつときつと、明るい光が流れこんで、あなたの内に多くの人が飛びこんでいます。

たとえ悪魔に正義がふみにじられそうでも、私が忙しいのにとほっておきますか。たとえ世の中が信仰も道義もなくなつて、獣の様な生活に人間が落ちそうでも、今少し修養してからと言つて見ていますか。

私やあなたの昨日までは悪かったかも知れない。過去の悪かったことが、今から飛び立つに何の邪魔になる。過去を葬って、前途に生きることが、私たちの向上の生活である。私たちにあるのは過去ではなくて、現在であり、将来である。

過去善かつたことが今している悪の言い訳にはならない。今している努力が過去の悪によつて亡びはしない。過去に顔をむけて、前途を背にして、後すぎりしては愚痴言つたと何になる。

私に一人の従兄がある。何度会つても、その家柄がどこかの城主の末裔だとか、名字帯刀が免されたとか、何々流の皆伝を組父がどうか、そんな話ばかり聞かせる。それでいて本人は仕事が嫌、家は段々衰える。

日清戦争で玄武門破りで金鷄勲章をいただいた天下の修身の話の主人公が酒にやつれて旅役者になつたのより、名も知れぬ一兵卒でも、静かに親を養う方がどれだけよいか。

立て、そして、登れ、今日一段、明日一段。

明日の光明を握れ、そして、それに走れ、過去を惜しむな。悲しむな。今日、そして、今日、それが充実すれば、きつと過去はよいにきまつている。